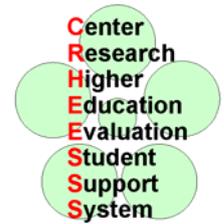


週刊センターニュース No.83



第83号(2005年10月31日)毎週月曜日発行
発行: 金沢大学 大学教育開発・支援センター
URL: http://www.kanazawa-u.ac.jp/faculty/daikyou_rche/index.htm

共同学習会のご案内

第92回

日時 11月9日(水) 16:20~17:50

場所 金沢大学角間キャンパス総合教育棟5階D10講義室(北棟)

通常と会場が違いますのでご注意ください。なお、今回も、双方向遠隔授業システムを用います。鶴間キャンパス保健学科5号館5104教室、および富山大学の2キャンパスの教室にも送信されます。

主催 金沢大学大学教育開発・支援センター

共催 金沢大学保健管理センター、金沢大学学生相談専門委員会、
富山大学保健管理センター、富山大学学務部

発表者 鈴木 健一(保健管理センター)

日向 繁(学生部学生支援課)

田上 芳美(保健管理センター)

青野 透(大学教育開発・支援センター)

テーマ 「変革期のメンタルヘルス支援」

概要 9月29日と30日の2日間にわたって三重県津市で開催された「平成17年度 東海・北陸地区メンタルヘルス研究協議会」(主催: 国立大学法人保健管理施設協議会、独立行政法人日本学生支援機構、国立大学法人三重大学)の参加報告である。この協議会は、大学の構成員(学生及び教職員)のメンタルヘルスに関する研究成果の発表と参加者相互の研究協議を通じて、学生の人間形成に対する支援と援助のあり方について啓発と普及を図ることを目的とするものであり、今回は「変革期を迎えた大学運営とメンタルヘルス支援」と題して開催され、80名近くの参加者があった。笠原嘉氏(名古屋大学名誉教授、『精神病』(岩波新書)『青年期』(中公新書)等の著作で有名)による基調講演内容のほか、各分科会等での議論について報告する。学生相談を担当しておられる教職員さらには、学生支援にご関心をお持ちの方々の積極的な参加を期待する。

第93回

日時 11月15日(火) 16:20~17:50

場所 金沢大学角間キャンパス総合教育棟南棟2階大会議室

発表者 直江 賢治(学生部就職支援室)

青野 透(大学教育開発・支援センター)

テーマ 「学生中心の学生支援・就職支援に向けて」

概要 10月12日~14日の3日間にわたって福島市で開催された「平成17年度全国学生指導研究集会」(主催: 独立行政法人日本学生支援機構、全国学生指導研究会連合会、国立大学法人福島大学)の参加報告である。この研究集会は、学生指導に関する研究成果の発表と参加者相互の研究討議を通じて、学生指導業務の改善と発展の方策について研究することを目的とするものであり、今回は20

7 高等教育機関から 300 名以上の参加者があった。二つの講演のほか、各分科会（「就職支援のあり方」・「学生中心の大学という観点での就学指導」）等での議論について報告する。各部局で就職支援に携わっておられる教職員の方々はもちろん、広く学生支援にご関心をお持ちの方々の積極的な参加を期待する。

立教大学大学問題連続セミナー第 4 回に参加して

10 月 19 日、立教大学において大学問題連続セミナー第 4 回に参加した。立教学院総長室調査役の寺崎昌男氏による「カリキュラムと授業 大学の勝負を分けるもの」を受講した。筆者は当センターにおいて大学教育研究開発部門に所属し、主にカリキュラムの調査研究を担当している。恥ずかしながら、対象とするカリキュラムについて遅ればせながら講義を受けたが、その内容はわかりやすく大変有意義であった。寺崎氏は大学史研究が専門であり、1994～1997 年立教大学全学共通カリキュラム初代部長、昨夏まで日本教育学会長などを歴任された高等教育研究のエキスパートである。

カリキュラムは、学生に対して大学が文化の総体から何を選んで科目として置くかという大学の教育精神の表明であり、カリキュラムの目標設定も含めたカリキュラム作りは、大学の実力が最も反映されると指摘された。カリキュラムの日本語訳は「教育課程」である。「教育課程」である以上、正課活動と正課外活動とを含まねばならないが、大学設置基準における「教育課程」は正課活動のみを指していること、さらに、正課活動の一部として hidden curriculum を考慮する必要性を述べられた。

カリキュラムは、広がり (scope) と順次性 (sequence) という 2 つの座標軸に基づいて規定される。Scope の軸に、大学が選択する科目を配置し、sequence の軸は、どのような順序で学習させていくかを示すのに使われる。立教大学において 1997 年に実施されたカリキュラムでは、教養の部分は総合科目、外国語教育、体育、情報の 4 つの柱を立てた。当時としては新しいものであったと付け加えられた。カリキュラムの目標として、「専門性に立つ教養人の育成」とし、多くの大学が暗黙に考えていた「教養ある専門人の育成」という目標とは一線を画した。外国語教育の目標は異文化理解、総合科目の編成の目標を環境、生命、人権、宇宙の 4 つにするなど、カリキュラム編成の目標を常に明確にした。強調されたのは、カリキュラムは常に変えることがその本質であるという点である。時代に合ったカリキュラムの目標、文化の選択が必要であると指摘された。そのとき必要なのは、カリキュラムは学生のためにあることを忘れないことであり、教員のエゴや縄張り意識をいかに最小限にとどめることができるかがカリキュラム作りの成否を決めると述べられた。

現在、学生の資格志向が強まっている。大学の機能分化が進むとき、リベラルアーツが資格対応かどうかし大学は生き残れないのではないかと予想を述べられた。資格を取得した後、社会で実践者として生き抜く上で最も重要な能力は、反省的熟考であり、これを支えるのが大学でのリベラルアーツ教育である。資格対応とリベラルアーツの有機的連関を考慮したカリキュラム設計が今後重要になるとの意見であった。カリキュラムは各々の大学固有のものであるが、一つの大学の将来像ととらえることができる。

さらに、アメリカと比較して大きく差をつけられているのが大学院のカリキュラムであること、2007 年問題に関連して授業で最も考慮すべきは自学自習の技法を教えることであるといった様々な提言がなされた。（大学教育研究開発部門 西山）

センターからのお願い

センターニュースで取り上げてほしいテーマを募集します。また、センターニュースを読んでのご感想や当センターへの要望などをメールにてお寄せください。

センターでは、共同学習会の話題提供、ランチョンセミナー担当を随時募集しておりますのでご連絡ください。

info-rche@ge.kanazawa-u.ac.jpまでお願いいたします。